

しあわせ

5 月 号



おしっこできて、よかったね
(ある幼稚園の先生の声)

「手を合わす母」

五月二十一日は降誕会、親鸞様のお誕生をお祝いする法要。三月末から本願寺では、親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要が行われている。

親鸞聖人は、七高僧のお導きによって悪重く障り多きもの、すなわち私達凡夫が救われてゆく道を八万四千と言われるお釈迦さまのみ教えの中から見出された。それがお念仏のみ教えである。

人間は様々な障害に会い、そして苦しみ悩む。それはあたかも障害物競走のようでもある。

怒り・ねたみ・愚痴という自らの欲望から出てくる煩惱にわが身を焦がすのが凡夫・私たちである。

その煩惱の身を「信心喜ぶ身」へ転じて、行き詰まりの人生を往生、力強く生き往くことができる人生へと転換して下さるのが阿弥陀如来の御本願である。

それを明らかにして下さったのが親鸞聖人であり、阿弥陀様が私達をお導き下さるために親鸞様となって現れ出てきて下さったと感謝しお祝いの降誕会である。

法座案内

△御誕会法要▽

五月 二十一日(日) 昼席

二十二日(月) 朝席・昼席

ご法話 自坊住職

△法味の会▽

五月 十九日(金) 午前十時

お話 住職

府中町山田二丁目一五十三
栢原山 龍仙寺
電話(〇八二二八)一四八二



十年ほど前のことです。五月ごろのある朝、お寺の庫裏にいた坊守が、幼稚園の園舎の方から、男の子の大きな泣き声を聞きました。「せんせー。おしっこもれたあ。」

ああ小さい子がおもらしをしたのだなと気づき、坊守は庫裏の窓から、その様子を窺っていたそうです。するとそこに一人の先生が走ってこれ、開口一番、こう仰ったそうです。

「○○君、よかったね！」

幼稚園でおしっこできて、よかったね。」

まったく想定していない言葉だったと坊守は驚いていました。わたしも聞かせてもらって、まさに目からウロコでした。きつとわたしだったら、「だいじょうぶ、着がえもあるから心配しなくていいよ」と、ひたすら慰めていたと思います。しかし、そのような言葉では、その子の涙をぬぐうことはできなかったでしょう。状況は目に浮かぶようにわかります。おもらしは堰を切ったように始まると、あつ

というまに下着もズボンもぐっしよりです。うなだれて視線を落とすと、足もとには水たまりのようです。ああ…と顔をあげると、その様子をまわりでたくさんのお友達が見ていたでしょう。まさにその子は、もうどこにも逃げ場がない、そんな世界に一人立ちつくしていたのだと思います。そのような状況でいくら「心配しなくていいよ」と慰めても、むしろ○○君はもつと自分を責め、心を閉ざしていったかもしれません。しかしその先生は、○○君に起こった出来事をぜんぶ受けとめつつ、たった一言で、その子の見ている景色をまっさらに描き直してくださいました。

「よかったね、おしっこできたね。」

その一言で、その子に起きた出来事は一八〇度、意味がひっくり返ったことでしょう。

あとから先生方に伺いますと、その子は入園して間もない幼い子だったそうです。子どもたちはみな同じですが、入園してくる子ども

もたちは、はじめてお母さんお父さんから離れて、しかも集団生活にとびこんでいきます。人生で最初の、そしてもしかしたら一番大きな冒険かもしれせん。はじめはどの子も泣くものですし、春頃は、とくに泣き声が絶えません。その子も園での生活に慣れず、どうしてもお手洗いができなかったそうです。先生方は、こまめにお手洗いにいくよう指導してくださいているのですが、その子はどうしてもおしっこができません、毎日おうちに帰るまで、必死になってがまんしていたということ、(○○君、体こわさないといいいけれど…)と、先生方はみな心配しておられたそうです。その朝はどうにもこらえれなかったのでしょう。しかし、その先生はたった一言で、○○君にまっさらな世界を拓いてくださったのでした。「おしっこできて、よかったね」と。もしかしたら次の日からは、お手洗いに足が向いたかもしれせんね。

自分ではどうすることも出来ない悲しみを、受けとめてくださる方がいる。わたしには思いもよらない景色を、開いてくださる言葉がある。お念仏をいただいているということ、まさしく、そういうことなのです。わたしには受けとめられない生死の苦しみを、阿弥陀さまが抱きとめてくださっています。そして、生と死を貫くいのちの意味を、仏さまの言葉がひらいてくださっています。それが、南无阿弥陀仏のお六字なのです。先月、その先生は退職していかれました。幼稚園でお世話になった長女がお便りを渡したところ、後日、園を通りがかった長女のところへ、先生は目を真っ赤にして駆けよってくださったと聞きました。○○君に駆けよられたときと重なり、最後まで変らぬ先生の姿に、味わわせていただきました。受けとめてくださる方がいる温もりと、命の意味をひらいてくださる言葉を賜っている尊さを。